

バートランド・ラッセルの教育思想(2) : 教育目的 の問題

高田, 熱美
九州大学医療技術短期大学部

<https://doi.org/10.15017/101>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 6, pp.1-11, 1979-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン :
権利関係 :

バートランド・ラッセルの教育思想 (2)

—教育目的の問題—

高 田 熱 美

The Educational Thought of
Bertrand Russell (2)
—The Problems with the Aims
of Education—

Atsumi Takada

序

人間は人間によってのみ人間らしくされる。教育とは、その人間らしさを展望しながら、意図的に、ある価値を人間らしい方法で伝達することである。教育している人間と教育される人間とが、いつも教育的行為ないし教育的関係の成立を意識しているとは限らぬとしても、人間の成長発達という大きな企てについての了解乃至展望が教育にはつねにある。教育は、人間の理想、人間らしさ、人間の完成された状態を展望しながら、意図的に具体的な価値を子どもに伝えるのである。そうした価値は、知識・技能、とりわけ読書算であったりする。したがって、教育が直接伝達するものは具体的な価値であって、これをさしあたり教育の目標としてもよい。しかしこれは当座の目標であって、その目標が仕えるべき次の目標が当然求められる。こうして直接必要ではないとしても、教育は人間の究極的目標をその視界から除くことはできないのである。教育の究極目的と人間の究極目標とが合致する理由がここにある。

この小論は、このような理解に立って、Bertrand Rusesell における人間の理想を解明し、そこから教育目的を導き出し、その意義と限界とを明らかにしようとするものである。

九州大学医療技術短期大学部

I 生きられる世界

Bertrand Russellは、宇宙との関わりで人間の生き方、あるべき理想を決定しようとする古典的思想家である。「Copernicus 以来、人間は自ら借取していた宇宙的な重要性をもたないことが明白となっている。」¹⁾「人間は宇宙的にはとるにたりないもの」²⁾であるのだ。にも拘らず、「Thales 以来哲学者たちは世界を理解しようと努めてきた」³⁾と述べ、その試みを肯定し続けるのである。もちろん、古代の哲学者が世界を宇宙と見たように、Russell にとっても世界とは宇宙のことなのである。

世界宇宙とは何であろう。Copernicus の発見以来、宇宙は無限の拡がりをもつことになった。Russell においても、人間の微小さに対して宇宙は無限なるものであった。だが、宇宙の無限性は、Bruno が英雄的な激感をもって理解したような人間の可能性の無限性ではない。⁴⁾ Russell の宇宙は、近代自然科学の思惟によって構成された、者事実あるいは事件の無限の総体なのである。

Russell は、自己の世界の見方が「四つの異なる科学即ち物理学・生理学・心理学・数学的論理学」⁵⁾から生れたという。いま、ここで、Russell の認識論を検討する余裕はないし、またその必要もないが、その結論はこうである。

つまり、「世界は変化する状態をもつ物からではなく、事件から成っている。」⁶⁾ということである。これは世界を抽象化した認識論の極致といえる。中性一元論 (Neutral Monism) と称されるこの理論は、精神と物質という Descartes が従来主張してきた二元論を消滅させたように思われた。「感覚が本質的に関係的ではない出来事であるとすれば、心的出来事と物理的出来事とを基本的に違ったものとして見る必要はない。精神も一片の物質も大きく相違してはおらず、ときには事実として同じである素材からつくられた論理的構成 (logical construction) と見られるようになる。」⁷⁾つまり、「一片の物質は因果法則即ち物理学の因果法則によって結びつけられた事件群である。精神は因果法則即ち心理学の因果法則によって結びつけられた事件群である。」⁸⁾

世界は因果の線の論理的構成であるという主張は、人間の感覚・知覚から世界が離れてしまったことを意味する。この世界は人間が生きられる世界ではない。これは温かいイメージを失った不毛の抽象的世界である。

Russell はこのようなものとしての世界をひたすら理解して行かねばならないというのであろうか。であるとすれば、世界は無限の論理的構成であるので、理解し終えることは不可能であるのみか、そのような試みさえも意味を為さないであろう。けだしこの世界は生きる意味を与えない世界なのであるから。この場合、たかだか、人間の生活に役立つかぎりでの理解という意味において、わずかにその意味を残すだけであろう。しかしながら、Russell は「世界を理解するということは究極的な善のひとつである。」⁹⁾といているので、彼は、世界を理解することを生活の手段や功用の意味には取っていない。

世界を理解することが、人間が生きる意味となりうるためには、世界それ自体が単なる論理的構成ではなく、生きられる意味、人間にとって親密なイメージをもたねばならない。すると、Russell が世界を理解しなければならないというときの世界は、自然科学の対象としての

世界ではなく、生きられる意味を有しうるような世界と解せねばなるまい。

こうした意味の世界は論理的構成としての世界と対立しない。世界は重層的意味をもっていて、論理的因果の線から成る世界は、その表層に視点をおいたとき見えてくるものといえよう。もっと正確に言えば、主体が第三人称として処理されるものと見る世界即ち対象化する世界、人間の自我主体が思惟した抽象的世界、それが論理的構成としての世界である。

世界の対象化ないし客体化は思惟の主体である精神によって為される。こうした働きの原理は、精神と物体とを峻別した Descartes の二元論によって可能になることは明らかであろう。Russell は Descartes の二元論を批判して、世界つまり精神と物体とを中性の論理的構成へ帰してしまっただが、こうした抽象化を推進した源淵は Descartes の精神主体にあったのであって、Russell もまた Descartes の二元論という西欧近代の原理に立っていたのである。Russell は自覚してはいなかったであろうが、Russell の中性一元論は、むしろ Descartes 哲学に基礎づけられた自然科学的認識論の終点といえるのである。

こうした世界に対して、人間が理解せねばならない世界とは、主体と客体との分裂を越えた、統一的で相互作用的な宇宙的一体感を呼びまます、生命の充足した世界ではあるまいか。「自己の生命がいよいよ宇宙の生命に融合する」¹⁰⁾

「生の流れとの深い本性的な和合」¹¹⁾と Russell が語るとき、私はそう解せざるをえない。これを神秘主義と称し、古代ギリシア的な世界観ということもできる。だが、これをたんに時代遅れの世界観として一蹴することはできない。逆に、Russell は、Descartes 哲学における近代代理性の世界を追求しながら、同時にその行き詰りを意識し、それを包括しつつ、それを越えて、本源的に生きられる世界を創造するために苦悶していたというべきであろう。

II 知恵

Russell が模索した生きられる世界の哲学的イメージは明白ではない。すると、Buber がかって断言したように、Einstein の偉大な発見以来、世界は生きられる意味、イメージを喪失したのであり、「新しい世界像—像なし」¹²⁾ ということになるのであろうか。否、希望が失われたわけではない。Buber 自身がその著『人間の諸問題』の中で解き明かして行ったように、世界との対話、協調、和合、が存在しうるかぎり、新たな世界のイメージ・概念の創造は可能であろう。

しかしながら、Russell は、人間は世界を理解せねばならぬと提言するのみで、世界が何であるかを説明してはいない。それゆえ、Russell の世界概念の探究を進めるよりも、ともかく、それを理解せねばならぬのは何故であり、理解することによって人間に何が起こるのかを明らかにしよう。また、それこそが、先決であり、しかも教育の目的を知ろうとしているわれわれの本来の意図にかなうことなのである。

Russell は、その著「教育と社会体制」(1932)において、「まず第一に、個人は、Leibniz の monad のように世界を映し出さねばならない。何故か。それは、知識と理解力とは私には輝やかなしい特性と思われるから、と答えるほかはない。」¹³⁾ という。知識と理解力の発揮は人間らしいこと、人間であることのひとつの証しであるが、Russell においては、それがとりもなおさず世界全体へ向けられるという点に注目したい。Russell によると、さらに、世界を認識するだけでは十分ではないのであって、「世界は感情によって映し出されねばならない」¹⁴⁾ のである。感情によって映し出すということの意味は明晰ではないが、Russell が冷厳な知性による世界の客体化即ち世界を自然科学の対象として見ることに終始していないことは明らかであろう。

だからこそ Russell は次のように述べることができたのである。即ち、「この流転の世界において、人びとは変化の原因としての役割を荷い、自らその原因であることを意識して意志を働かせ、力に気づくようになるのである。知識、

感情、そして力、これらすべては人間存在の完全さを求めるときに最大限にまで拡大されねばならない。」¹⁵⁾ こうして、Russell は人間の完全さを「力・知・愛」¹⁶⁾ という伝統的な価値理念で表わすことになる。

世界を知り、感じるということから、どうして、力・智・愛といった価値理念が浮びでるのか。世界を知理的、情的に映し出すとはどういうことであるのか。Russell は、すでに30年前の『自由人の信仰』(1902)において、世界の認識から同様な結論を導き出している。彼は宇宙の無限空間に驚嘆したあと、「宇宙の全重圧」「外部世界との魂のあの恐ろしい遭遇から諦観知恵、および人間愛が生れる。」¹⁷⁾ という。ここには、まだ人間の弱小さに対するニヒリズムがある。しかし、宇宙の宏大さという事実から知や愛という人間的な価値を導出するという方法は一貫している。しかも、Russell の晩年においては、宇宙の宏大さに対比して起こる人間の微弱さの自覚は、実は人間の偉大さを示す逆説であったことが明白となる。「だが、宇宙の力を前にして、われわれの弱小さ、無力さを自覚すればするほど人間がこれまで成しとげてきたことは増々驚きとなるのである。」¹⁸⁾

これによって、Russell が今まで首尾一貫して説いてきた宇宙と人間との間における分裂、矛盾が一応解決されたと見るべきであろう。それゆえ、世界を知と情とにおいて映し出すということは、世界と人間との関係を自覚することなのである。Russell にとって、人間の力の限界を自覚することが、同時に人間の可能性の出発点となるのである。したがってまた、人間の限界の自覚そのものが人間理性の可能性であるのだ。それは人間を解放する原点でありそれによって、「人間の尊厳性を高めること」¹⁹⁾ ができるのである。

Russell にとって、人間の尊厳性は理性の可能性と関っている。この点では、人間の尊厳性をキリストの愛即ちキリストが十字架における自己の死をもって人間を愛したという事実から導き出すという、かのキリスト教の伝統に、Russell は立ってはいない。Russell は神を排

し、神を背後にもたぬ理性の子である。ともかくも、Russell にとって、人間のかけがえのなさは、宇宙の事実の認識という人間理性の出現ないしその可能性を出発点とするのである。ただし、出発点はそのまま最高の価値となるのではない。それは人間としての知恵や人間相互の愛とならなければならないのである。

宏大で、永遠の宇宙に対して、人間が移ろい易い微弱なものであるという自覚は、人間の生のはかなさと、それゆえに生じる相互のあわれみとを呼び起こすが、一転して、それは、人間の偉大さである知恵と愛へ連なるのである。したがって、世界を理解することは出発点であって、知恵や愛への手段ではない。またそれは、それ自体が独立して目的となるというわけでもない。認識と愛あるいは知識と知恵とは不即不離のものである。宇宙という宏大な世界の認識が人間の生きる知恵になることを Russell は、『西洋哲学史』(1945)のなかで、Spinoza の人格の高邁さを称えながら語っている。先ず次のようにいう。「にも拘らず、人類の普通の運命よりももっとひどい(と思われる)ものを耐えねばならないのが運命であるときには、全体、あるいはともかく自分自身の悲しみよりももっと大きな事柄について考えるという Spinoza の原理は有用な原理である。人間の生活は、ありとあらゆる悪や苦しみを含んでいながら、宇宙の生活の中の無限小の部分にすぎない、と反省してみることが慰めになる時さえあるのだ。このような反省は一つの宗教を構成するのには十分ではないであろうが、苦痛にみちた世界にあっては、それは正気に向かうひとつの助けであり、完全な絶望からくる麻痺への解毒剤となるのである。」²⁰⁾

宇宙全体について、あるいは宇宙全体から考えるということは、客観的に見るという意味を含んでいる。Frankl は強制収容所での「絶望との闘い」の中で同様なことを語っている。ちなみにそれは次のようなものである。「そこで私は一つのトリックを用いるのであった。突然私自身は明るく照らされた美しく暖い大きな講演会場の演壇に立っていた。……そして私

は語り、強制収容所の心理学についてある講演をしたのだった。そして私をかくも苦しめ抑圧するすべてのものは客観化され、科学性のより高い見地から見られ描かれるのであった。……このトリックでもって私は自分を何かの形で現在の環境、現在の苦悩の上に置くことができ、またあたかもそれがすでに過去のことであるかのようにみることが可能になり、また苦悩する私自身を心理学的・科学的研究の対象であるかのように見ることができたのである。スピノザはエチカの中で次のように語っている。『苦悩という情緒はわれわれがそれに明晰判明な表象をつくるや否や消失してしまうのである。』²¹⁾

ある意図をもって状況を客観的に見ることはたしかにトリックであり、それは結果的に苦悩や悲しみ、怒りといった感情の解毒剤となるのだ。こういう見方が可能になるためには、たんに認識するだけでは不十分であって、それはまさに宇宙全体いわば Spinoza がいう「永遠の相において (Sub Specie aeternitatis)」見ることに支えられなければならないのである。「Spinoza — 自己自身の知恵に従ってひたすら生きてきた最高の賢者のひとり——が、人びとに忠告して、『永遠の相において』過ぎ行くものを見よといったことを記憶すべきである。」²²⁾と Russell は力説し、「いま」と「ここ」とを越えて、²³⁾「非個人的」²⁴⁾に生きるべきことを随所で語る。

時間としての「いま」を越えるとは永遠の相において生きることであり、空間としての「ここ」を越えるとは宇宙の相において生きることであろう。もちろん両者は永遠あるいは普遍という概念で表わされるものである。それゆえ、Russell がいう世界の認識を出発点として生じる知恵は、Spinoza がいう賢者の知恵と重なり合う。Spinoza には世界は即ち神であったが、Russell には神という名称はない。しかし、Russell が Spinoza に深く影響されていることは明白である。けだし、Spinoza の神は、神というよりも実在・必然としての真理であって、人格いわばペルソナを有した神ではないのである。同時に、ここでいわれる世界は、自然

科学の対象としての世界ではなく、永遠乃至普遍という象徴としての世界に転換されている。つまり、事実としての宇宙—世界は、象徴としての宇宙—世界へ止揚されているのである。

事実としての世界を認識することを出発点として生まれた人間の自覚即ち知恵は、感情を排除しない。「非個人的な思惟の発展と密接に平行して非個人的な感情の発展がある。」²⁵⁾ であって、無知の支配から解放された人は、「むしろ、個人的な心配から解放されない人よりもはるかに深く友情と慈悲と同情を感じるであろう。」²⁶⁾

ところで、知恵とは、永遠の相の下即ち非個人的・公平無私に出来事を見るということであるが、それはいかなる構造をもつのであろうか。知恵は知識そのものではないので、「知識を探求する専門家には必ずしも現存してはいない。」²⁷⁾ と Russell はいう。知恵は「総合的洞察」と「人生の目的に対するある自覚」から成っている。²⁸⁾ 総合的洞察が少くとも認識—知識を要素にもっているが、それと同一ではないように、人生の目的に対する自覚は感情を要素にももつのであるがそれと同一ではない。知恵は、そのような要素を含みながら、総合的洞察と人生の目的に対する自覚とを統合する何ものかである。それは、世界を包括的視野の中に入れ、人生を時間の流れ全体として見る働きである。

現代はこうした知恵を必須としている。とくに、現代は、拡大と分裂の時代であり、近代自然科学と技術は膨大な知識を量産してそれを促進した。これは、人生の目的と世界の理解を確実にするどころか増々不確実にした。こうしているうちにも人間の技術の威力は拡大していく。かくして Russell はいう、「知識と技能が増すにつれて知恵は増々必要になる。なぜなら、そのような増大はわれわれの目的を実現する能力を増し、それゆえにわれわれの目的が賢明でなければ、悪に至る能力をも増すからである。…それで、もし、知識が増大しつづけるならば世界は将来において現在以上に知恵を必要とするであろう。」²⁹⁾ と。

III 愛

「生活が十全に人間的であるべきだとすれば、それは、なんらかの意味で人間生活の外にあるように見えるある目的へ奉仕するものでなければならぬ。その目的とは、神・真理・美といったような非個人的で、人類を越えた目的なのだ。生命をもっともよく助長する人びとは自分の目的のための生活はもたないのである。彼らはむしろ、漸次的な体現と見えること即ち永遠的な何ものかを人間存在の中にもたらしことを目指している。……その永遠の世界との接触は……われわれの現世的な世界がもつ闘争や明らかな失敗によっても完全には破壊しつくされえない強さと根本的な平安をもたらすのである。Spinoza が神への知的な愛と呼んだものは、この永遠であるものの幸福な冥想である。それをひとたび知った人びとにはそれは知恵の鍛えなのである。」³⁰⁾

こう見ると、Russell がいう知恵は、本来的に哲学と関っているようである。「哲学の価値は一部は思惟に一部は感情に関係している。もっともこれら二つの方向における哲学の影響は密接に関連している。理論的な面では哲学は可能なかぎり宇宙を全体として理解するのに役立つ。情感の面では、哲学は人生の諸目的の適切な感得に役立つ。」³¹⁾ 「非個人的な思惟の発展と密接に平行して非個人的な感情の発展がある。これは少なくとも同等に重要であり、同等に哲学的な世界の見方から結果するべきものである。」³²⁾ Russell においては哲学することそのものが人間の思惟と情感を非個人的、普遍的かつ公平無私にするのだ。これは知恵そのものへ至る途である。

知恵は教育によって育成されるところの重要な目標である。³³⁾ Russell は、「私が意味する教育は教授 (instruction) を方法として一定の心的習慣および一定の人生観と世界観とを形成することと定義されるであろう。」³⁴⁾ という。こうして形成されるものはいずれも知恵へと至るものである。

ところですでに見たように、Russell においては世界の事実の認識から知恵と愛とが生れ、

しかも知恵は愛と関わりながら発展するのであった。知恵と並んで愛もまた教育の主要な目標なのである。むしろ愛が教育の根本目標と称してもよい。「人間の精神が奴隷化する方向に押し進められていることに対して立ち向かうべき何が存在するであろうか。私は、キリスト教および仏教の本質であるところの、あの古代宗教の個人に対する尊敬以外に何ものをも見出すことができない。」³⁵「東洋は仏陀を崇拜し、西洋はキリストを崇拜するが、両者とも愛を知恵の奥義として教えている。」³⁶とRussellはいう。

愛は知恵の奥義でありしたがって知恵以上に人間を非個人的にする。「人間性の中で努力なしに『自己』を越えさせるものがある。これらの中で最も一般的なものは愛である。」³⁷それゆえ、知恵と愛とが教育の根本目標であり、教育を支える人間的基礎であることには問題はあまい。さらに、知恵と愛とが人間の個を普遍的ならしめる働きをもっていることも正しいであろう。しかし、世界の事実の認識に立ち、それを越えて現われる世界の永遠性を理解することから生れる知恵と愛とは、同一の根を有するものであろうか。知恵が愛を排せず、むしろ愛に含まれるものであるとしても、愛が知恵の奥義であるとはどういう意味なのであろうか。

愛とは何か。それはあらゆるものとの結びつきである。その点で、SpinozaやRussellがいう世界の認識や理解も愛のひとつの在り方であろう。けだし、世界を理解するというのも、世界と自己とが結びつくことに他ならないからである。「感情としての愛は……二つの極の間を移動している。即ち一方の極には冥想における純粋な欲び、他方には純粋な慈愛がある。」³⁸とRussellがいうのもうなづけるのである。しかしながら、人間に対する同情や友愛、あらわれみ、といったいわゆる人間的な愛は知恵と同質のものであろうか。『自由人の信仰』におけるRussellの愛は、世界の事実の認識からくる人間の微弱さ、孤独がそのまま人間のはかなさとなり、人間相互の同情となっていたが、いわばこれは不変の自然つまりものに対する人間のはかなさ、「もののおわれ」というべきもので

あった。ところが、Russellの晩年の愛は、世界が事実を越えたイメージとしてとらえられ、知恵が生きうる土台が示されたように、愛もさらに積極的な人間の可能性として展開されたのである。

にも拘らず、Russellの世界はSpinozaのそのようにベルソナ即ち人格としての様相を呈しない。Spinozaの「神に対する知的な愛」が必然論理に対する愛知であるように、Russellの愛は、人間そのものに対する愛よりも世界全体への愛知を意味する。愛知は知恵の始まりであり、「愛が知恵の奥義である」としても、そしてまた、世界の観照が人間的な愛への契機になるとしても、知恵と愛とは同質のものではない。ときには、Russellは「……世界が必要としているのはキリスト教的な愛ないし憐れみである。」³⁹と力説する。愛とは結びつくことであり、結びつくとは本質的に知ることであろう。したがって愛は知恵でもある。しかし知恵は愛であるかと問われるならば、しかりと断定することは難しいであろう。愛は、永遠的世界の冥想や観想と交錯しながらも、それよりもはるかに根源的な生の様式にして価値なのである。愛はRussellの世界概念からは導出できないものである。

それではRussellはどこから愛を導き出したか。Russellの世界概念にはキリスト教神学はない。むしろRussellは仮借なきキリスト教教義の批判者であった。Russellの愛はキリスト教神学からの説明を排する。⁴⁰むしろ愛は哲学的根拠づけを排する。逆に、哲学の根拠となるものが愛というべきであろう。それゆえ、これはRussellの生の実存から到来したものという他はない。「……1901年の始めに私は宗教的な人びとが『回心』と呼んでいるものとたがわぬ経験をした。」⁴¹とRussellはいう。この経験の発端および内容は彼の自伝が明らかにしている。Russellは、自分の師であるWhiteheadの夫人が死へ至る激痛に苦しんでいるのを前にしたという。「彼女は苦しみの壁によってすべての人とあらゆるものから切り離されているように見えた。そして、ひとりひとりの人間の魂の孤独

感が突然私を襲った。……五分とたたないうちに次のようなある想いらしきものが私の中をよぎった。——人間の魂の寂寥さは耐え難いものである。宗教的教師が教えさとしたような愛という最高の強さによる以外には何ものも人の魂に立入ることはできない。この愛からほとばしり出ないものは、いかなるものも有害であるか、よくても無用である。」⁴²⁾

Russell の宗教的な感情は続いた。第一次世界大戦における反戦平和運動もそのような宗教的確信が動因であった。「私が宗教的であれば、神の声と呼んだであろうような何かが、私に反対をおしとおすことを強いた。」⁴³⁾ という。

こう見ると、Russell の愛は、宇宙における人間の孤独ではなく、人間社会における孤独の経験から発したものと見える。Russell の知恵は世界と統一的に結びつくことであり、愛は人間相互が結びつくことである。したがって、知恵が愛を拡大するとしても、愛はそれ自身、独自の地平を有しているのである。宗教的回心といった経験をしたあと、Russell は『自由人の信仰』を著わしたが、これは宇宙の非神話化、非人格化即ち自然科学の対象となった宇宙における人間の孤独が主題となっていて、人間相互の愛は間接的かつ派生的なものとして扱われている。

宇宙における人間の孤独は、自然科学及び近代的理性と古代のギリシア的理性との相克を経ながら、やがて、後者への回帰によって乗り越えられようとする。かくして、Russell の初期に見られた近代の理性と世界観は、ギリシアの思惟と世界観性へ転換され、知識の追求が知恵の形成へと変る。しかしながら愛は全く異った領域における経験であって、いかなる場合にもRussell の哲学的世界観からは定められえなかったのである。それゆえ、Russell の哲学は、ギリシアおよびストアの、そしてSpinozaの影響を受けた理性と人間への宗教的な愛との二元論に立ち、それが統一されぬまま展開されることになるのである。したがって、Russell の哲学の首尾一貫性のなさ、不徹底さは、近代理性とギリシア的理性との対立ではなくて、それが

乗り越えられたあとにも残るギリシア的理性と宗教的な愛との不統一性にあるというべきである。「愛が知恵の奥義である」ということが正しいとしても、Russell の哲学には知恵と愛との平行性が存続しているということである。それゆえ、Russell が教育の目的を説明するためにあげる歴史上の人物にも、知者と聖者とが混交して、しかも同等・同質なものとして示されることになる。すなわち、Russell は、全宇宙を映し出すひとりひとりの人間を「仏教徒やストアの哲学者、キリスト教の聖者やすべての神秘主義者たちが考えたように」⁴⁴⁾ 見るというのである。またRussell は次のようにも言う、「他のいかなる者よりも権力を有した者を四人選ばねばならないとすれば、私は仏陀とキリストとピタゴラスとガリレオを挙げるであろう。……四人のうちのいずれも他を奴隷にするような権力ではなく、人びとを解放する権力を求めたのであった。」⁴⁵⁾ と。

人びとを解放する権力を愛と称するならば、ピタゴラスの思索もガリレオの探究も愛と見えるであろう。しかし彼らの愛は世界と自己との第三人称的關係、Buber のいう「われーそれ」の關係で語られる愛である。その愛は「われーなんじ」⁴⁶⁾ という人格的關係ではない。もちろん、キリスト教的な愛が結集した「人間的な宇宙」⁴⁷⁾ が土台にあるわけではない。それぞれ異なった構造を有する愛がRussell には並存しているのだ。

IV 個人

Russell が知恵と愛とを教育の目的としていることは明白である。そして、いずれもこれらは人間の深い孤独（それはRussell 自身の体験でもあった）から発したものであった。にも拘らず、Russell は、その哲学において人間の中の絆よりも世界と人間との絆を構築することを優先した。いかにRussell が人間相互の愛を強調しても、哲学の論理においては外に在る永遠の真理・普遍実在との合一が基調であって、人間への愛はその結果ないしその派生として浮び出るにすぎないのである。

Russell は知恵と愛とをそなえた人間は本質的に個人的であるという。「われわれが描いてきたような完全な個人における知識や感情の要素は本質的に社会的ではない。……孤独の中で考えられる個人の意志は『かかるものを在らしめよ』という神のような意志である。市民の態度は非常に異なったものである。市民はあれこれの方法で自分の社会に在る相争う意志から調和を取出そうと気づかっている。市民が本質的に自己の隣人にとりまかれているのに反して、個人はそれ自体として存立するのである。」⁴⁸⁾

Bode は、Russell が教育の目的であるとす
る「個人」を批判する。「結果として、Russell
の心においては個人性と市民性とは対立したま
まである。」⁴⁹⁾というのだ。Bode は、Russell
が理想としている個人が社会あるいは市民と分
裂していて、それが未解決のままであるとい
うのである。「Russell の論述の中に現われる個
人の精神は抽象となっている。個人はより広い
社会生活の“機能”となることによるのみ人
間としての地位を成就するからである。」⁵⁰⁾

こうRussell を批判したBode は、教育にお
ける個人と社会との分裂は真理あるいは知識の
見方に起因する、という。⁵¹⁾ こうして、Bode
はプラグマティズムの立場に立って、Russell
の教育哲学の基礎にあると彼が見ている真理観
を吟味する。もちろんRussell 自身もDewey
を中心とするプラグマティズムを度々批判した。
Dewey が真理を経験のなかで生ずる広義の有用
さを見るのに対して、Russell はあくまで真理
は実在する普遍と見るのである。⁵²⁾ しかしこ
こでRussell とDewey とを比較検討する必要は
ない。問題はBode の批判が当たっているかど
うかということである。

Bode は、個人は有機体的な社会の一員とし
て活動するとき完成されると見ているが、Ru
ssell の個人は社会を越えて真理と直接向かい
会おうとする超越的人間なのである。こうした
Russell の個人をBode は抽象といった。Ru
ssell の個人は古典的なストア哲学やSpinoza
の思索に影響されているという点ではひとつの
抽象ということもできるであろう。これは、現代

の状況から離れているので、市民社会の高みから
見るのである。それは当然ともいえるのであって、
もともとRussell の個人は、他方では突如とし
て生じた孤独のなかでの宗教的回心というRu
ssell 自身の個人的体験を上台にしているから
である。Russell はその体験を哲学的方法で精
密に論証することはしなかったが、その個人は、
Kierkegaard における神へ向かう実存・単独者
を思い起こさせる。⁵³⁾ Russell は、Bode の批判に
答える論文のなかで、そのような個人をキリスト
と仏陀の精神によって象徴する「人間の精神を奴
隷化の方向に向けているこの強大な流れに立ち
向かうべき何が存在するであろうか。私は、キリ
スト教および仏教の本質であるところの、古代
の宗教的な個人の尊重以外に何も知りえないの
だ。」⁵⁴⁾したがって、Russell がいう個人には哲
学及び宗教的な超越者が重なり合わされている。

Bode のRussell 批判は的はずれである。
Russell の個人が、超市民・社会的であるとい
うことから、その個人が反社会的であるとか、
市民社会と分裂しているとするのは正当ではな
い。ましてや、それを貴族趣味であるとか、エ
リート・天才にのみ可能な目標であるとか批判
するならば、それは不当というべきであろう。
さらにまた、これが現実の教育によって達成可
能な目標であるかを問う必要もない。重要なこ
とは、Russell が理想とする個人なるものが、
真実、理想として追求されるに足るものである
かどうかということである。

この問題の探究において、われわれは、Ru
ssell が例示したキリストや仏陀という聖者の
具体的な姿を吟味する必要はない。これは問題
が大きすぎ、しかも本来の論点をくもらせる。
Russell が市民に対置している個人は、孤独を
自覚している存在であって、それゆえに、永遠
の真理を渴望し、それと結びつこうとしている
ものである。真理と関っている者は社会を超越
するが同時に彼は孤独というはかはない。たと
えば、モーゼやイエスに代表されるような宗教
的な教師と称される人びとは深い孤独の淵にあ
ったといえる。無論、その孤独は他者の理解を
越えていて、他に期待され、何かを望まれはす

れども理解はされえないという意味でのものである。Russell の個人は真理には開かれているが、他者には開かれていないと見るのはこの意味では正しいのである。

しかしながら、Russell の個人は他者と結びつく哲学的原理をもたないという点で、まさに「Leibniz のモノダのように」孤人——単独者なのである。問題は、Russell の個人が社会を越えていることではない。それが人間と人間とが会おう原理即ち愛の原理を欠いているということが問題なのである。たしかに、日常の市民は克服されねばならない課題であり、真の個人とはそれを抜け出す者のことである。しかし同時に、個人は人間であり、それは他者との本質的な関わりなしには完成されることの不可能な存在なのである。いかなる人間も人間であるかぎり自己の存在を他者に負うのであり、他者との結びつき——愛なしには完成できないのである。

Russell の孤独の体験は深い。その行動はやさしく、心情は温かい愛と同情に満ちていたという。しかしながら、彼の思惟はそれを客観的な論理として構成する哲学的方法をもたなかった。そのため、Russell が目標とする個人は、「われ—なんじ」という人格的關係としての愛の原理をとりこむことができず、孤高な、第三人称における閉ざされた自己にとどまるのである。

結び

Russell は教育の目標に関して多くの混乱を呼び起こした。知恵と愛、ギリシア的知とキリスト教的愛との二元性は統一に至らないまま教育の目標として提示されているのである。しかし、この分裂は現代文明がその内奥に有する本質的な混迷ではあるまいか。この意味でRussell は現代の思想に巨大な問題提起をしているといえよう。そして、教育の目標をこのような宇宙的視野から見るとは決して無意味ではない。これは時代遅れというより、教育の本質にたえず投げかけられるべき現在のなものである。

ここでRussell の教育目標の意義が明らかになろう。それは、哲学的な統一と構造を欠いているとしても、知恵と愛とが教育の基本的かつ究極的な目標であるとするのは真実であることである。知恵と愛とは自己を脱して行くという働きであり、これは、Russell が「非個人的 (impersonal)」と称する超越を志向する。それゆえ、知恵と愛とは自己超越を本質とするともいえる。

Russell が教育の目標に超越をおいたことは、その内容に問題があり、しかも、それへ至ることが極めて難かしいとしても、正しいのである。所詮、人間が光の高みに達することはできないとしても、その光の輝きを示され、それを人間の無限の目標とすることは、人が生きるうえで不可欠なことなのだ。

ではRussell はこのような至高かつ至難の目標をかかげるだけで、ごく普通の子どもの教育については一顧だにしなかったのであろうか。否、Russell は、超越的な個人という人間の究極目標をかかげながら、他方では現実の一般市民の教育を考察していた。人間が社会生活を営み、生きて行くために必要な技術や知識の教授を軽視してはならないのだ。⁵⁵⁾ このことはRussell が究極目標とする「個人」と矛盾しない。「個人」は究極目標であって、それに至る道は人間の現実から出発せねばならないことは自明である。Russell は、人間が高尚な理想を追求する存在であると同時に、他方では極めて感性的かつ心理的なものであって、誤ち易い生物であることを認識していた。そこでRussell は、人間の生理や本能、欲望といったものに着目した。超越する個人と人間の本能とは、対照的であるため、人びとは、矛盾を感じるかもしれない。だが、両者は連関する。「他の人間的な事柄と同様、教育には進歩への道は唯ひとつしかない。それは愛に支配された科学である。」⁵⁶⁾ とRussellがいうとき、科学とは、生理学や心理学を含んだ現代科学のことを指しているのである。そして、これが教育の方法となるのだ。

知恵と愛との統一が果されていないRussell の教育目的論において、とくに心理学を主たる

武器とした方法がいかにして知恵と愛へ至らしめる力となるか。方法の問題については改めて稿を起さねばならない。

注

- 1) Russell, B. : History of Western Philosophy, Allen & Unwin, London, 1946, P. 753
- 2) Russell, B. : My Philosophical Development. Allen & Unwin, London. 1959, P. 213
- 3) ibid, P. 230
- 4) Bruno, G. : De l'infinito universo et Mondi, 1584. 『無限、宇宙と諸世界について』清水純一訳、現代思潮社、1967. 参照。
- 5) Russell, B. : My Philosophical Development, Allen & Unwin, London, 1959 P. 16
- 6) Russell, B. : Portraits from Memory and other Essays, Allen & Unwin, London, 1956, P. 149
- 7) Russell, B. : My Philosophical Development, Allen & Unwin, London. 1959 P. 139
- 8) Russell, B. : Portraits from Memory and other Essays, Allen & Unwin, London, 1956, P. 152
- 9) Russell, B. : On Education in Early Childhood, (1926). Unwin Books, London, 1973. P. 167
- 10) Russell, B. : New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin, London, 1968. P. 210
- 11) Russell, B. : The Conquest of Happiness, Unwin Books, London, 1961, P. 159
- 12) Buber, M. : Das Problem des Menschen, Verlag London Schneider, Heidelberg, 1948. 『人間とは何か』兎島洋訳、理想社、昭和36. P. 39
- 13) Russell, B. : Education and the Social Order. Allen & Unwin, London, 1932. P. 10
- 14) ibid, P. 11
- 15) ibid. P. 11
- 16) ibid. P. 11
- 17) Russell, B. : Mysticism and Logic and Other Essays, Unwin Books, London. 1963. P. 46
- 18) Russell, B. : New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin, London, 1968 P. 191
- 19) Russell, B. : Mysticism and Logic and Other Essays, Unwin Books, London, 1963. P. 42
- 20) Russell, B. : History of Western Philosophy. Allen & Unwin, London, 1946, P. 562
- 21) Frankl, V. E. : Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager. Verlag für Jugend und Volk. Wien. 1947. 『夜と霧』霜山徳爾訳、みすず書房、昭和38. P. 180
- 22) Russell, B. : New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin, London, 1968. P. 189
- 23) Russell, B. : My Philosophical Development, Allen & Unwin, London 1959. P. 213
- 24) Russell, B. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin, London, 1956. P. 165-168
- 25) ibid, P. 168
- 26) Russell, B. : New Hopes for a Changing World Allen & Unwin London. 1968. P. 190.
- 27) Russell, B. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin, London, 1956, P. 161.
- 28) ibid, P. 161
- 29) ibid, P. 164
- 30) Russell, B. : Principles of Social

高田 熱美

- Reconstruction, (1916), Allen & Unwin, 1930. P. 245-246
- 31) Russell, B. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin, London, 1956. P. 165
- 32) ibid, P. 167-168
- 33) ibid, P. 162
- 34) Russell, B. : Mysticism and Logic and Other Essays, (1917), Unwin books, London, 1974. P. 33
- 35) Russell, B. : My Mental Development, In : The Philosophy of Bertrand Russell, edited by Schilpp, P. A, (1944), Harper Torchbooks, New York. 1963. P. 20
- 36) Russell, B. : New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin, London 1968, 1968. P. 191
- 37) Russell, B. : On Education in Early Childhood, Unwin Books, London, 1973, P. 39
- 38) Russell, B. : Why I am Not a Christian, (1957), Unwin Books, London, 1967, P. 51
- 39) Russell, B. : Human Society in Ethics and Politics, Allen & Unwin, London, 1954, P. 9
- 40) cf. Russell, B. : Why I am Not a Christian, Unwin Books, London, 1967
- 41) Russell, B. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin, London, 1956, P. 35
- 42) Russell, B. : The Autobiography of Bertrand Russell, 1872-1914, Allen & Unwin, London, 1967, P. 146
- 43) Russell, B. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin London, 1956, P. 35
- 44) Russell, B. : Education and the Social Order, (1932). Allen & Unwin, London, 1951, P. 12
- 45) Russell, B. : Power, (1938) Allen & Unwin, London, 1948, P. 284
- 46) cf, Buber, M. : Ich und Du, Insel Verlag, Leipzig, 1923.
- 47) Chardin, P. T. : Le Phénomène humain Edit. du Seuil, Paris, 1955. 『現象としての人間』美田稔訳, みすず書房, 1969. P. 308
- 48) Russell, B. : Education and the Social Order, Allen & Unwin, London, 1951, P. 12
- 49) Bode, B. : H. : Russell's Educational Philosophy, In : The Philosophy of Bertrand Russell, Ed. by Schilpp, P. A, Harper Torchbooks, New York, 1963, P. 633.
- 50) ibid, P. 639
- 51) ibid, P. 640
- 52) Russell, B. : History of Western Philosophy, (1946), Allen & Unwin, London, 1962, P. 774-782
- 53) 牧野宇一郎「個人と市民ーラッセルの教育目的ー」大阪市立大学文学会紀要第5巻第3号 昭和29. 参照
- 54) Russell, B. : Reply to Criticisms, In : The Philosophy of Bertrand Russell, Ed. by Schilpp, P. A, Harper Torchbooks, New York, 1963, P. 733
- 55) Russell, B. : On Education in Early Childhood, (1926), Unwin books, London, 1973, P. 141
- 56) ibid, P. 127